

〈わたしの一冊〉

*Le théâtre professionnel à Paris. 1600-1649*, Étude par Alan Howe. Documents analysés par Madeleine Jurgens et Alan Howe. Transcriptions par Andrée Chauleur et Pierre-Yves Louis, Paris, Centre historique des Archives nationales, 2000

戸口民也

17世紀前半といえば、フランスにおいて演劇が社会的な地位を固めた時期である。題名からもうかがえるように、俳優という仕事が「職業」として成立するようになっただけでなく、ピエール・コルネイユの例でもわかるように、すぐれた劇作家であることが社会的名声をもたらすようになった時期でもある。そのことはコルネイユ自身が『舞台は夢』*L'illusion comique* (1635年初演)のなかで、登場人物の口を借りながら高らかに歌い上げている通りだ。「今や演劇は、非常に高い地位にあるのじゃ。だから、みんなが熱愛しておる。あなた方のごころには軽蔑されておったがの。今日では、知識ある人たちがみんなの愛好するものでな。パリの話題、地方の憧れじゃ。王侯の好む最も楽しい娯楽だし、一般の人たちの無上の楽しみでもあり、貴族方の気晴らしでもある。数ある娯楽のうちでも第一のものとなった。(…)非凡な才能の持ち主が、夜を徹して劇作に励む。芸術の神アポロンに最も美しいまなざしで見染められた人たちが、巧みな芸の一端を披露する。人間を富で押し測らねばならぬなら、演劇も収入の良い職業の中に入ろう」(第5幕最終場、伊藤洋訳)。

上に紹介した題名等からも推察されるように、*Le théâtre professionnel à Paris. 1600-1649* は国立文書館 Archives nationales に保管されているパリの公証人の記録のなかから、17世紀前半における演劇の関わる文書のうち、俳優・劇団に関する文書を集めたものである。なお参考までに付け加えれば、同じく17世紀前半のパリの公証人記録のうち劇作家に関する文書は、本書の姉妹編ともいえるべき *Écrivains de théâtre. 1600-1649*, Documents réunis et présentés par Alan Howe, à partir des analyses de Madeleine Jurgens, Paris, Centre

historique des Archives nationales, 2005 に収録されている。

公証人の記録に基づく演劇研究といえば、古くは Eudore Soulié, *Recherches sur Molière et sur sa famille*, Paris, 1863 があり、20世紀に入ってから S. Wilma Deierkauf-Holsboer や Madeleine Jurgens の仕事をあげることができるだろう。なお、*Le théâtre professionnel à Paris* と *Écrivains de théâtre* の両方で Howe を支えていたのも Jurgens である。こうした一次資料の発掘という地味な仕事が演劇研究の進展にどれほど貢献しているか、説明の必要はないだろう。

さて、*Le théâtre professionnel à Paris* の構成だが、前半は Howe による研究(劇団・俳優たちの半世紀にわたる活動をたどったもの)、後半は 458 点の文書の Analyses (要約)と、そのうちとくに重要な 20 点の Transcriptions (全文転写)からなっている。文書の中には未刊文書 documents inédits が数多く含まれており、それが新たな発見につながっている。ひとつだけ例を上げて紹介しよう。

Transcription VII はフランスにおける職業俳優の先駆者ともいえるべきヴァルラン・ル・コント Valleran Le Conte が 1615 年 10 月 22 日にパリで新たに劇団を結成したことを記した文書で、その資料的価値は極めて高い。というのも、これまで長いあいだ、ヴァルランは 1612 年を最後にパリを離れてオランダに赴いたあと、間もなく死んだものと考えられていたからである。しかし、この文書が見つかったことで、彼は 1615 年にもまだ活動を続けていたことが確認されたわけである。またこの文書によって、これまでは仮説にとどまっていたことだが、ヴァルランが 1613 年から 1614 年にかけてハーグ Den Haag/La Haye、へ

ント Gent/Gand、カンブレ Cambrai など演じていた可能性がほぼ確かなものとなったのである。

そればかりではない。新たに結成された劇団は「悲劇、喜劇、田園劇その他の劇を演じる」と文書に記されているが、そのレパートリーにはアレクサンドル・アルディ Alexandre Hardy の 12 編の戯曲（悲劇 6 編、田園劇 2 編、幕間劇 3 編、ジャンル不詳の劇 1 編）が含まれていることが、この文書の 2 日前に締結された 1615 年 10 月 20 日の売買契約書（analyse 166）と突き合わせることで明らかとなった。しかもその 12 編は、ヴァルラン劇団に加わっている俳優クロード・ユソン Claude Husson が所有者であることも文書 VII に記されている。Deierkauf-Holsboer によれば、ヴァルラン・ル・コントが座長として所有している数々の戯曲は、アルディの戯曲を含め、すべて弟子の俳優ベルローズ Pierre Le Messier, dit Bellerose が受け継いだものとされていたが、この説は覆されたのである。しかも 1615 年 10 月の劇団協約にはベルローズの名前は記されていない。つまり、ベルローズは師匠ヴァルランの劇団を引き継いでいるわけでもない、ということだ。

話は変わるが、実は私も Archives nationales やアンジェ Angers にあるメヌ・エ・ロワール県立文書館 Archives départementales de Maine et Loire で公証人記録を調べた経験がある。すでに長いこと中断したままだが、私はヴァルラン・ル・コントの生涯をたどりつつ論文を書いていた。そのさい、Deierkauf-Holsboer が取り上げていたある文書の日付に疑問をもち、パリに滞在する機会を利用して Archives nationales を訪れ、問題の文書を実際に手に取ってみたのである。その結果わかったことは「17 世紀フランス演劇史研究ノート — 1598 年パリ：古文書の読み違いをめぐって」と題して論文にまとめ、私のホームページに掲載しているので、興味のある方はお読みいただきたい。

とにかくこれが事の発端で、その後はパリやアンジェに一定期間滞在する機会を得るごとに文書館に通い、あわよくば未刊資料の発掘も期待しつつ、400 年前の文書の束を 1 枚ずつめくったりしたものだ。私の文書館通いは 1980 年代末から 1990 年代後半まで、断続的に細々と続いた。限られた時間しか使えなかったため、作業にあたっ

た日数は延べにしてパリとアンジェそれぞれで 15 日程度にすぎない。それでもパリでは 50 点ほど、アンジェでも 2 点の未刊文書を見つけ出すことができた。パリで私が見つけた文書のなかには *Le théâtre professionnel à Paris* に収録されているものもある（analyses 2, 3, 5, 6 [transcription I], 13, 19, 21 [transcription II], ... など）。Howe の仕事には質量ともに遥かに及ばないが、同じ時期に同じようなことを彼もしていたのだと思うと、感慨を禁じ得ない。

ところで、私がアンジェで見つけた未完文書 2 点のひとつはアレクサンドル・アルディが名前を連ねている劇団協約文書（1600 年 3 月 22 日）で、アルディ関連の文書資料としてはこれまで確認されているどの資料よりも古いものだった。しかもアルディは作家ではなく俳優として劇団に加わっており、また劇団の座長はヴァルラン・ル・コントではなく、ラ・ポルト Mathieu Lefebvre, sieur de La Porte だった。これは、アルディは 1597-98 年から 1612 年までずっとヴァルランの座付き作者を務めていたとする Deierkauf-Holsboer の主張とは明らかに食い違うものである。さらにこの劇団には、先に紹介したように 1615 年 10 月の時点でアルディの戯曲 12 編の所有者とされている俳優クロード・ユソンも加わっていた。この二人の関係が 1600 年にさかのぼることが、ここから明らかになったわけである。

しかもこの話には後日譚がある。アンジェの文書の transcription を私のホームページに掲載しておいたところ、それを Howe が見つけ出し、自分の論文で利用したいとメールで連絡してきてくれたのである。もちろん私は即座に快諾した。後日 Howe が送ってきてくれた論文は、私にとって良い記念となっている。

公証人の記録をはじめとする文書の発掘は今後も続けられるはずである。Archives nationales に保管されている膨大な文書のうち、まだ誰にも気づかれていない文書が残っていないと断言することはできないし、パリ以外の都市でも文書館で眠ったままの記録は必ずあるはずだ。今の私には、文書発掘のための時間も手段も事実上ない。Howe のような研究者がこの仕事を続けてくれることを心から願っている。